

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究（２）テキスト・思想・運動」2018年度第1回研究会報告書

開催日時：2018年6月24日（日）10:30-18:30

開催場所：本郷サテライト5階セミナールーム

参加者数：14人

共催：共同利用・共同研究課題「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究（２）テキスト・思想・運動」，科研費挑戦的研究（萌芽）「人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレゼンス・アフリケーヌ』の複合的研究」

#### プログラム

1. 中村隆之（AA研共同研究員，早稲田大学）趣旨説明
2. 佐久間寛（AA研所員）今後の研究会の方針・スケジュールについて
3. 全員 所信表明
4. 立花英裕（AA研共同研究員，早稲田大学）『プレゼンス・アフリケーヌ』と文化の概念
5. 総合討論

#### 概要

はじめに本共同利用・共同研究課題の研究代表者である中村隆之より、以下の趣旨説明があった。

2015年度より3年間の研究期間で採択された共同利用・共同研究課題「『プレゼンス・アフリケーヌ』研究：新たな文化=政治学のために」（以下、第1期と略記）では、その集大成となる国際シンポジウムの開催を通じて、当該研究に関する国際的ネットワークを構築するとともに、1947年から始まるこの雑誌が「黒人世界」における思想的プラットフォームの役割を果たしたことを再確認した。本研究（以下、第2期と略記）は、第1期の研究を継続的に発展させるという位置づけのもと、新たなメンバーを加えて発足した。その特色は、カバーする言語面、地域面、学問面において多様な専門家で構成したことにある。とくに第2期ではその副題に「テキスト」という単語を入れているように、フランス語、英語に加え、スペイン語、ポルトガル語を専門とするメンバーが加わったことで、テキストの組織的読解をひとつの研究の柱とすることが目指される。個人研究の方向としては、ひとつの提案として、真島一郎編『20世紀〈アフリカ〉の個体形成』で編者が示した「個体形成論」という視座を念頭に置いたところから、2018年5月の日本アフリカ学会での中村報告「20世紀黒人詩人ダヴィッド・ジョップにおける〈現前するアフリカ〉」をおおまかに再現した。ひとりの個とその作品に徹底してこだわるという方途は、本研究にも十分に活かされる可能性がある、という理由からである。最後に、第2期の基本図書として、上記図書のほか、ギルロイ『ブラック・アトランティック』、

ジェームズ『ブラック・ジャコバン』、ファノン『地に呪われたる者』を挙げた。

(文責 中村)

つぎに副代表である佐久間より、本共同利用・共同研究課題の今後の方針とスケジュールに関して以下の説明があった。

・スケジュール

- 年2～3回の研究会を開催する。うち1回は「文化<資本>」科研との合同開催とする(2日間)
- 午前の部にはテキスト読解(担当者全訳作成)を、午後の部には口頭発表(2～3人)をおこなう。
- 第2回国際シンポジウムを2019年9月26～28日に開催する。テーマは「言語、文化、政治/デジタル化、翻訳」。研究会メンバーは原則として全員参加を目指す。フランス側のカウンターパートは、R.フォンクア氏(『プレザンス・アフリケーヌ』誌現編集長)とA.C.ロモ・ミヤジウム氏(ストラズブール大学)。
- 成果は、全訳したテキスト集と論集の2冊刊行を目指す。

・方針

- 原則として午後の部へは全員参加、研究期間中に最低一回の口頭発表を行い、成果として論文等を公表する。
- 口頭発表に対してコメントはつけない。全員が議論へ参加する。
- 発表者は極力配付資料を準備し、また書誌情報を明記すること。そのことによりメンバー間の情報共有を促す。
- コピーはAA研開催の場合は当日可、本郷サテライトの場合は事前にデータを送付すること。
- 発表に際しては異分野・異言語・異世代研究者に配慮すること(専門用語、使用言語、フォントの大きさなど)
- 発表後には要旨を提出すること(400～800字程度)。
- 成果の公表に際しては可能な限り謝辞をつけていただきたい。

午後の部では、まず全参加者による所信表明が行われたのちに、立花英裕が「『プレザンス・アフリケーヌ』と文化の概念」というタイトルのもとで以下の報告を行った。

第1回目の研究会なので、何を論ずべきか迷ったが、少し広い視野からアプローチすることにして、次のような問いを頭の中にめぐらせながら発表した。①雑誌『プレザンス・アフリケーヌ』(以下PA)を黒人運動やフランス語圏の言説空間の中でどう位置づけるのか、②1950-60年代における反植民地主義の高揚の中で果たした役割、③エメ・セゼールはPAを通してどんな仕事をしたのか。①については、『黒人世界評論』、『正当防衛』と比較した。その中でPAは、「アフリカ」という想像域を「ヨーロッパ」に対置することによって自己意識(言説主体)を確立することに成功し、戦前の雑誌を質的にも量的にも凌駕する創造(そして批評・研究)の場になったと指摘した。論説や評論も重要だが、雑誌に掲載された、あるいは周辺で刊行された文学作品・民話などを読み込まなければ、PAの意義は捉えられないと考えたい。②フランスの言

説空間を検討。特に『エスプリ』周辺のカトリック左派と『レ・タン・モデルヌ』。発表ではブルデューを援用しなかったが、PA が強力な〈界〉 champ を形成し、影響力ある論壇を提供するに至る上で、カトリック左派との関係は無視できない。③A.ジョップと協力しつつ、セゼールが演劇作品を通じて「文化」についてどのような考察を進めたのか、その一端を明らかにするように努め、例として『コンゴの一季節』公演をビデオで観た。

多くの有益な質問によって、今後の研究のヒントをいただいた。終わってみて感じたことを最後に記しておきたい。PA 研究は時代を限定した方がよいのではないか。たとえば、1947 年から 70 年代前半まで。それ以降は参考文献ではあっても研究対象ではないとしては？もう 1 ついえば、アフリカの専門家に、Cheikh Anta Diop や Le père Tempels を PA との関連の中で研究していただけると有益だろうと思う次第である。

(文責：立花)